

大自然 聖女。
を司る

王宮を見捨て 辺境で
楽しく生きていく！

Daiishizen wo tsukasadou seiyo,
oukyuu wo misute henkyou de tanoshiku ikiteiku!

2

著 末松 樹
絵 中條由良



登場人物紹介

アルバス

王国の第1王子。
計算高く、狡猾な性格。

セマルグル

気高きグリフォン。
辺境の魔物が慌てて
逃げ出すほど強い。

ユーリ

セシリ亞を一番近くで
見守る相棒。
一見普通のリスだが、
実は魔法が使える。

ヴォーロス

ライティング・ベアと呼ばれる、
雷魔法を使う熊。
普段は紳士的だが、
怒ると怖い。

モコシ

山に棲む大地の女神。
おっとりした性格だが、
何やら怒っている
らしい……？

シルヴァ

辺境に流れ着いた謎の少年。
身元不明で、自分の名前すら
憶えていない。

セシリ亞

自然にまつわる魔法を
使いこなす元聖女。
追放されたショックで
前世の記憶を取り戻す。

スー

火山地帯に棲むスライム。
好物はモモ。

プロローグ 辺境の楽しい生活^{へんきょう}

私は、セシリ亞・ルイスは、土の聖女と呼ばれていて、王宮で土魔法を使い、国の発展に大きく貢献^{けんかん}していた。

だけど、私がやることは国内の農作物^{のうばくもつ}の収穫量^{しうがくりょう}を増やすとか、鉄^{てつ}を産出^{さんしゆつ}するとか……とにかく地味^{じみ}。

土や地面に触^ふれていないと使えないという制約^{せいごく}もあって、重要な役割^{えきがく}ではあるものの、どうしてもその凄さ^{けいさ}がわかつてもらいたいくらいのよ。

結果、『聖女と呼ばれているくせに何もしていないのは何事だ！』って言い出した第二王子ルーファス様に、辺境の地ジャトランへ追放されてしまった。

人が住んでいない未開^{みかい}の地を目の当たりにし、大きな海を越えて戻ることも出来ないとショックを受けた私は前世——日本の家電メーカーで開発を行っていたエンジニアであつたことを思い出した。

私は、土魔法の一種である、思い描いた鉱物^{こうぶつ}を生み出せる魔法『具現化魔法^{ぐげんかまほう}』が使える。

それと前世の知識を組み合わせることで、日本の家電を再現して快適に過ごせるようになったのかいできよね。

でも、今快適に暮らしているのは、家電のおかげだけじゃないの。ジャトランで出会った索敵魔法が得意なリスのユーリや、雷魔法が得意なライトニング・ベアのヴォーロス。そしてグリフォンのセマルグルさんという喋れるモフモフたちと一緒に暮らしているのも大きい。

喋れるようになったのは私が生み出したリング——どうやら期せずして『知恵の実』になってしまったらしい——を食べたからなんだけど。

そして、一緒に暮らしていないけど、猫の姿をした神様のバステトさんや、その息子のマヘス君もいろいろと助けてくれるしね。

先日も、何故か第二王子が自分で追放したはずの私を連れ戻そうとしてきた。

最初は人を雇つて送り込んで来たかと思えば、それが上手くいかないと見るや、次は騎士団の人たちを大勢連れて、王子自らこのジャトランへ乗りこんできたの。

しかも、私の魔法を封じる特殊な腕輪を用意して。

だけど、二人が助けてくれて、なんとか全員無事に王子たちを追い返すことに成功した。

それからは、平和そのもの。

ご近所の獣人族さんたちの村や、少し離れた鬼人族さんたちの村とも作物と加工品や調味料を交換する仲になつて、お米だつて作れだし。

でも、まだまだやりたいことはいっぱいある！

第一章 新たな目標

発酵させた生地を円形に伸ばし、表面にケチャップを塗る。

その上にベーコンやピーマン、トマトにコーン、バジルなんかを乗せたら、その上にチーズをたっぷりかけて、いざオープンへ。

美味しそうな香りが漂ってきて……出来上がりつ！

「みんなー！ お昼ご飯が出来たよー！」

「わあー！ 美味しそー！」

「ふふつ、まだ熱いから、少し待つてね」

ユーリが真っ先にやって来たので、小さく切り分けて小皿に入れてあげる。その間に、ヴォーロスとセマルグルさんも現れた。

「セシリ亞、ありがとう」

「ふむ。ピザは久しぶりだが……この熱々のチーズはたまらぬな」

「セマルグルさんはチーズが好きだもんね」

切り分けたピザが、あつとという間に消えていく。

セマルグルさんに久しぶりだつて言われてしまつたけど……そういうえば、最近は和食ばかりだつたものね。

このジャトランへ来て暫くは小麦を使つた料理しか作れなくて、やつとお米が作れるようになつたから。

思い返してみると……十食くらい連續で和食にしてしまつていたかも。

昼食を食べ終えたところで、ユーリがあることを聞いてきた。

「ねえねえ、セシリ亞。そういうえば、もう面白いものは作らないのー?」

「面白いもの……あ、お風呂ふろとか洗濯機せんたくきとかのことかな?」

「そうそう。セシリ亞は、ユーリたちが見たこともないものを作るもんうーん。私の具現化魔法を使つた家電製品を指しているみたいだけど、この間、電車を作つてそれ以降、サボつてしまつていた。

大昔に三種の神器と呼ばれていた、テレビ……は流石さすがに、放送局がないから無理で、冷蔵庫はセマルグルさんの冰魔法で実現出来た。洗濯機は作つたし、じゃあ他に何かつて言わると……掃除機そうじきとか?

けど、そもそも掃除するような家が……そつか! これだ!

「ユーリ、ありがとう! よく考えたら、お米や家電で食が充実しているんだから、次は住! 家をなんとかすべきよね!」

一応、今は私が土魔法で作つた石を積み上げた家に住んでいるんだけど……正直無骨で味気ない。「なるほど。獣人族よけいぞくさんたちも、大きな家に住んでいるもんねー」

「別に大きな家でなくても良いのだけど、毎回土魔法で出入り口ふきだしを塞ふさぐのもどうかと思うし、今は石の板を立て掛けているだけだから、万が一地震とかがあつたら危ないでしょ? だから、ちゃんとした家に住む方が安心出来るかなつて思つて」

私の前世——日本人としての実家はマンションだつたし、家電メーカーで働いていた時は二部屋しかない寮生活ようせいかつだつた。更に、セシリ亞として王宮に住んでいた時は、土の聖女として広い部屋が与えられていたものの、ある意味では寮みたいな感じだし、一戸建てに住んでみたいっていう憧あこがれはあるのよね。

お庭でお花を育ててガーデニングをしてみたり、小さな畑を作つて家庭菜園をしてみたり、大き

な犬を餌つてモフモフを堪能してみたり。

……あれ？ おかしいな。何一つ出来ていなければはずなのに、どの欲も既に満たされている気がする。

「そうだ！ そろそろ獣人族さんたちと作物を交換する頃合いだから、その時に相談してみようかな」

「じゃあ、善は急げだね！ セシリリア、獣人族の村まで電車を使って移動するよね？」

「ええ。そうね。ヴォーロス、お願い出来る？」

「うん。任せて！」

以前は、私たちが暮らしている家の傍の川魚と、獣人族さんの村で作っている乳製品を交換していた。

だけど、私が土魔法で生み出す果物が美味しいので、そつちも交換して欲しいとお願いされ、対応している。

でも、実はこれ……私が日本の記憶を基に生み出した果物なので、あまり外に沢山出したくない。そういうこともあって、少量の果物を定期的に乳製品と交換してもらうことになっている。

「じゃあ、セシリリア。出発するよー！」

「ええ、お願ひ」

「わーい！ 速ーい！」

以前に日本の知識を基に作った電車に乗り込むと、ヴォーロスが雷魔法を使って電車を走らしてくれた。

私の肩に乗るユーリがはしゃいでいる。

レールを敷くのは大変だったけど、この電車のおかげで移動がとても楽になつたので、ヴォーロスには感謝してもし足りない程だ。

ヴォーロスの雷魔法は、家電の知識と相性が良くて、この電車に限らず様々なものに使わせてもらつているしね。

そう考えているうちに、景色がグングン後ろに流れて行き、あつという間に獣人族の村へ到着した。

「じゃあ、いつものように僕はここで待つていてるね」

ヴォーロスが言った。

彼が村に入ると、怖がられちゃうのよね。

「ありがとう。いってきまーす」

「いってくるねー！」

交換する果物を入れたバスケットを手に、ユーリと一緒に獣人族の村へ。

村の中に入ると、猫耳の生えた小さな女の子、リリイちゃんが私を見つけて駆け寄ってきた。

「あー！ セージよのおねーちゃんだー！ リスさんもいるー！」

「リリイちゃん、こんにちは。村長さんは居るかなー？」

「えっとねー……さつき、あっちでみたよー！」

「ありがとう。じゃあ、ちょっと行つてくるね」

「リリイも、いくー！」

そう言つて、リリイちゃんが小さな手で私の手を握つてくる。

モフモフな上に可愛いリリイちゃんとお話ししながら案内してもらい、無事に村長さんのもとへ辿り着いた。

「村長さん、こんにちは」

「おお、これはセシリニア様！ いつも、ありがとうございます。こちらに品物を準備しておりますので、どうぞ」

リリイちゃんにお礼を言い、持つて来たイチゴをプレゼントすると、凄く美味しそうに食べてくれた。

許されるなら、美味しい果物を獣人族の村人たち全員に分けてあげたい。だけど、そんなことをすると別の村——鬼人族さんの村にも同じことをしないといけないし、そうなつたらその二つ

の村の間の取引とか、いろんなことに影響^{えふきょう}が出てしまう。

なので、あくまで獣人族の村が取引出来る量で……と、村長さんからお願いされているのよね。『では、今回はそちらのブドウと、バナナでお願い出来ますかな』

「わかりました。では、私はバターとチーズをお願いします」

他にもリンゴや桃など、いろいろと持つて来ていたんだけど、これは後でユーリやヴォーロスと一緒に食べようかな。

「……そうだ！ えっと、今日はもう一つ相談がありまして」

「ほう。セシリニア様がご相談とは……どういった内容でしようか」

「えっと、実は家を建てようと思つていまして、この村に大工^{だいく}さんが居たら紹介して欲しいんです」

「なるほど……。ただ、残念ながら、この村の家は他の村からやつて來た大工に作つてもらつたのです」

「あ、そうなんだ。

他の村つていうと、鬼人族さんたちの村かな？ それともケンタウロスさんたちの村？ 私が

知つているのはその二つだけ、他にも村があるのだろうか。

「とはいえ、大工を専門としている者はおりませんが、家に関して何かあつた時に対応する者がお

りますので、紹介させていただきます

「はい。是非、お願ひ致します」

それから、村長さんに連れられて歩いて行くと、三十代くらいの男性を紹介される。

本職の大工さんではないけれど、村で家の屋根や壁が壊れた時とかに修理しているそうで、獣人族さんの中では一番建物に詳しいのだとか。

「セシリ亞様にはお世話になつておりますし、以前に毒を治療していただいた恩もあります。全身全霊で取り掛からせていただきますので、まずは家を建てる場所を拝見させていただけますか?」

以前私は、村全体が毒に侵された時に治療薬を大量に作つて助けてあげたことがあるのよね。それをいまだに感謝してくれているみたい。

そう言つてくれるなら、是非もない。

私は頷き、獣人族の男性を電車へと案内する。

「お願ひ致します。では、こちらへ」

男性は電車に驚いて、ヴォーロスにも終始ビクビクしていたけれど、そのうち慣れてくる……と思う。

拠点に着いてから、私は日星を付けていた土地に獣人族の男性を連れていった。

「この辺りで考えているんですけど、どうでしょうか?」

「なるほど。地面は綺麗に平らになつてるので、家を建てるには申し分ないかと」

それから間取りとかは一日置いといて、大まかな広さや要望などを聞かれた。

とりあえず私としては、ヴォーロスやセマルグルさんが入れるくらいに広くて、キッチンやお風呂があると嬉しいかな。

男性はメモを取り終えると、小さく頷く。

「わかりました。では、少し準備して……そうですね。明日の午後には参りますね」

「ありがとうございます。では、村までお送りしますね」

「い、いえいえ! 恐れ多いです! あれくらいでしたら普通に歩ける距離ですので、お気になさらず」

ヴォーロスに頼んで、明日迎えに行く……という話もしたけど、丁重に断られてしまった。

ヴォーロスも大丈夫だつて言つてくれたんだけどな。

とはいって、断られてしまつたのを無理に通すのも違うもんね。

一段落したので、昼食の準備をすることにした。

朝食がピザだったので、お昼は和食……と思つたけど、昨日は三食とも和食だつたし、違う方が

良いかな。

というわけで、少し考えてリゾットを作ることにした。これなら洋食だけど、お米が食べられるし、チーズも使うからね。

生米をオリーブオイルで炒め、事前に沸かしておいたお湯を注ぐ。

リゾットはお米をそのまま食べる時と違つて、粘り気を出さない方が良いので、そういうのはこれからいのがコツなんだよね。

本当はお湯ではなくて、ブイヨンとかコンソメとかを使いたいんだけど、そういうのはこれから研究かな。

そう考えながら何度かお湯を足し、弱火で炊いていくと、お米がふっくらしてきた。

あとは、獣人族さんの村で交換してもらつたバターやチーズを入れていき、味見をしながら海水から作った塩を振つて……出来たー！

「ふむ。チーズの香りがしてきたが、ピザではないのだな」

「これはリゾットっていう料理よ。チーズをたっぷり使つていてるから、是非食べてみて」

チーズが大好きなセマルグルさんが一番にやつて来て、ピザではないことに驚いている。

ふふつ、そのうちチーズフォンデュやラクレットを作つてあげようかな。

「わあ！ お米とチーズの組み合せって初めてだよねー？ 楽しみー！」

「セシリ亞。いつもありがとう」

ユーリとヴォーロスもやつてきたので、みんなで美味しく昼食をいただく。

午後は間取りを考えたり、さつき欲しいと思ったブイヨンを作つたりしようかなと思つていると、馬車がやってきた。

獣人族の人は、家の建築は明日からつて言つていたけど、何かあつたのだろうか。

「セシリ亞様。事前にお約束もなしに来てしまい、申し訳ありません」

「デュークさん！ えっと、まさかまた何かあつたんですか？」

「ええ、ありました。これは由々しき事態です」

馬車から降りて来たのは鬼人族の商人のデュークさんで、若い男性を二人連れて来ていた。

バステトさんの誤解による食料危機は解決したはずだし、獣人族の村だけでなく鬼人族の村とも果物の取引は定期的に行つてているし……一体、何があつたのだろうか。

「セシリ亞様！ 獣人族の村へ行つた際に、家を建てられるというお話を聞きました。我ら鬼人族は獣人族よりも筋力に長けておりますし、家も造れます。どうしてお声掛けいただけなかつたのでしょうか」

「え？ 由々しき事態つて……それ？」

「はい。例の食料問題を解決してくださつたセシリ亞様は、我ら鬼人族の命の恩人です。どうかそ

の御恩をお返ししたく、こうして家作りに長けた者を連れて馳せ参じたのです」

かつてバステトさんが息子のマヘスくんのために食料を捧げるようお願いしていたせいで、獣人族の村の食料が枯渇しかけていた。

でも、それはマヘスくんが食べられないものだけを捧げていたからだつてわかつて、私が美味しいご飯を作つて解決したのよね。

えーっと、みんな色々と恩に着すぎじゃないかな？ 獣人族さんたちの件も、鬼人族さんたちの件も、土魔法で生み出した食材で解決しているから、こちらが何か損した訳でもないし、あんまり気にしなくて良いのに。

「あの……家は獣人族さんたちにお願いしたので、大丈夫ですよ？」

「お待ちください！ 獣人族の村の家をご覧になられましたか？ 彼らは木で家を造りますが、我らはレンガで家を造ります。どちらが優れた家かは一目瞭然です！」

「一目瞭然なの？ 私は家電の知識はあつても、家とか建築に関する知識はないから、なんとも言えないのよね。

別に外見には拘らないから、過ごしやすい家であればそれで良いんだけどな。

「セシリア様。どうか、我らにもどんな家を建てたいか教えていただけないでしょうか。必ずご希望に沿つた家を建ててみますので」

うーん。獣人族さんは本職ではないつて言つていたし、鬼人族さんにお願いした方が良いのかな？

とりあえず、明日三者で話そようと伝え、要望を伝える。

素人の私が間に挟まるよりも、詳しい人たちが直接話した方が良いよね……と思つて意見交換を提案した。

だけど翌日……もつと面倒なことになつてしまふ。

「木の柱^{はしり}の間に、土で壁を作るだつて！？ 獣人族は一体何を言つているんだ!? 今から建てるのはセシリア様のご住居なんだぞ!」

「だからだよ。木と土で作れば夏は涼^{すず}しく、冬は暖^{あたた}かくなるんだ！ レンガで作つた家なんて、家の中の空気が悪くなる！」

「ふつ。木は燃えるし、腐る^{くさ}。土の壁なんて、魔獸がぶつかつて来たら一発で穴が空くぞ？ そんな危険な家にセシリア様を？ 馬鹿も休み休み言え！」

せつかく詳しい人達どうしで話し合つてもらおうと思ったのに……家に使う材料の違いで大揉めしてしまうなんて……

しかも、問題はそれだけではなくて……

「ふむ。どちらでも良いが、窓を大きくするのじゃ。将来、我が息子マヘスが住むことになるかも
しれぬのじや。いつでも日向ぼっこが出来るようにしておくのじや」

いつの間にか来ていたバステトさんが、家にいろいろと注文を付けている。

ちなみに今は猫の姿でなく、人型だ。

デューケさんも、まさか鬼人族の守り神が隣にいて、私の家の話をしているとは思わないだろう
なあ。

「はあ!? セシリ亞様のご住居だぞ!? 神殿のように厳かな霧廻氣と、重厚さが必要だろうが!」

「何を言つてはいる! セシリ亞様だからこそ、大地の優しさを感じられるように、家の中にも土の
床を作るんだ!」

「日向ぼっこをするための場所はどうなったのじや? そこは譲れぬのじや!」

「……つて、気付けば大工さんたちがヒートアップしてるつ! しかも、神殿のような霧廻氣だな
んで話が出ているけど、私はそんなの求めてないからね!?

「あの、すみません。普通の家で構わないんですが」

「はい。もちろん、セシリ亞様に相応しい神殿に致します」

「セシリ亞様の普通……やはり、神の木と呼ばれる聖木を探すところから……」

「ほ、本当に普通で良いのつ! 神殿に住みたいとも思っていないし、聖木つてなんなの!? 木で

もレンガでも、どつちでも良いから、普通の家にしてよおおおつ!

「どうしたものかと考えていたら、セマルグルさんが話しかけてくる。

「ふむ。どうやら、家を建てる者たちの意見が纏まらぬようだな」

「そもそも、私の話を聞いてくれていない気もするけどね」

「そうだ。ならば、その道の専門家に頼んでみるか」

セマルグルさんは、どうやら設計から手掛ける建築士みたいな人を知っているみたい。
「どうか、その種族自体が家を建てるプロというか、『家の精靈』と呼ばれているのだとか。
「お主たち。一旦、口論をやめるのだ」

セマルグルさんが対立している獣人族さんと鬼人族さんたちに声を掛ける。

「だから、荒壁に中塗りして仕上げに白土を塗れば、壁が呼吸して湿氣を調整してくれるんだよ!
アンタたちのレンガじや通気性が悪くて、カビが生えるのがオチだ!」

「カビだと? レンガ造りなら百年経つてもびくともしねえ! 壁なんて雨が続けば崩れてくる
くせに、余計な口出しをするなっ!」

あ、なんだか難しい話になつてはいるけど、いずれにせよヒートアップし過ぎて、纏まらないわね。
そう思つてはいるけど、セマルグルさんが怒鳴る。

「貴様ら! 黙らぬかあつ! これより、我らは家の精靈を呼んでくる! 言い争いでセシリ亞を

困らせるような貴様らには家など任せられん！ 今回の件は我的預かりとさせてもらう！」

「は、はいっ！」

「か、畏まりましたあつ！」

セマルグルさんの一喝に、獣人族さんや鬼人族たちがその場に跪く。

ようやく話を聞いてもらえた。

それに、この人たちも家の精霊のことは知っているみたいね。

とりあえず、家の精霊さんが来てから、改めて手伝つてもらうという話をしたんだけど……いつの間にかバステトさんが居ない？

キヨロキヨロと周囲を見渡していると、ヴォーロスが口を開く。

「あ、バステトなら、この人たちが口論し始めて、少しして帰つたよ」

「そうなんだ。それならまあいっか」

バステトさんも、埒が明かないと思って帰つたのかな。

ひとまず今日のところは解散となり、私たちも家の精霊さんが居る場所へ向かう準備をする。

「ふむ。我に乗つて行けばすぐに着くのだぞ？」

「そうかもしれないけど、今回はそこまで急ぎじゃないし、ピクニックみたいにみんなで歩いて行つても良いかなーって思つて」

「わーい！ ピクニック、ピクニックー！ ……ところで、セシリリアー。ピクニックつて何ー？」

ピクニックが何かを教えてあげると、ユーリはウキウキと楽しそうにしだした。

それを微笑ましく見つつ、お弁当を作る。

「セマルグルさん。とりあえず、昼食を用意したんだけど、夕方には到着するかな？」

「そうだな。それほど遠い訳ではないし、ゆっくり歩いて行つても明るい内に到着するであろう」

いつもは西へ行くことが多いのだけど、家の精霊と呼ばれている種族がいるのは、ここから東らしい。

電車のレールも敷いていないし、みんなで歩いて行くことにした。

「あ、セシリリアー！ あの木を見てー！ 秋になると、あの木の実がすっごく美味しくなるんだー！」

「そうなんだー。それは、収穫しないとね」

「うん！ ただ、ちょーっと硬いから、ユーリが殻を割つてあげるねー！」

ユーリが美味しいっていう硬い木の実だから……クルミかな？ だつたら、クルミパンとか、クルミ餅とかにすると美味しそうね。

そうだ。もち米があれば、お餅も作れるようになる。もち米つていうくらいだから、普通のお米

と同じ栽培方法で良い……よね？ 家が完成したら、是非ともチャレンジしてみよう。
そう思いながら、時折ユーリたちとお喋りしながら歩いていると、見覚えのある場所にやつてきた。

「ここは……この前、騎士さんたちと対峙した場所よね？」

「うむ、そうだな。あのバカ王子が我にちよつかいをかけてきた場所だが……また下らぬことを企んでおらねば良いが」

「ま、まあかなり反省した様子で国へ帰つていつたし、大丈夫じゃないかなあ？」

「わからぬぞ？ バカを治す薬はないと言ふからな」

あ、この世界でもそういう言葉があるんだ。

日本にも古くから似た諺があるけど……いやいや、流石に大丈夫でしょ。……大丈夫だよね？

「うう。万が一、同じようなことがあったとしても、次こそ僕は絶対に寝過ごさないからね？」

「ゆ、ユーリも頑張つて起きのー！」

「まあまあ。あんなことは滅多にあることではないから」

騎士さんたちを指揮していたルーファス王子によつて夜襲^{やしゅう}を掛けられたんだけど、ヴォーロスとユーリが眠つてしまつていて、なかなか大変だったのよね。夜行性のバステトさんとマヘス君のおかげで助かつたけど。

ひとまず過ぎたことは忘れて更に東へ進むと、不自然に枝が折れている大きな木があつた。

「なんだろ。枝を斧^{おの}か何かで無理矢理叩き斬つたみたいね」

「ふむ……むつ！ セシリアよ。その木の先を見てみるのだ」

「下り坂で……海岸に繋がつている？」

「うむ。位置的に、ここからあのバカ王子たちが上陸したのだろう。その際、通るのに邪魔だからと、この枝を叩き折つた……といったところか」

あー、ルーファス王子たちの仕業か。

土魔法で治してあげられたら良いんだけど、私が出来るのはあくまで植物の成長促進であつて、治療は出来ないのよ。

この木の種や苗があれば、この大きさまで育てられるんだけど、全く同じにはならないし、そもそも別の木なのよね。クローランとかではないから。

ルーファス王子に代わつて木に謝^{あやま}つて先へ進むと、小さな池があつたので、そこで昼食を摂ることに。

手頃な大きさの石があつたので、そこに腰掛け、バスケットに入れているお弁当を取り出す。

「今日のお昼はブリトーだよー！」

「ブリトー？ なんだか、いろんな具材が巻いてあるー！」

「そうそう。ユーリの言つた通りで、小麦粉で作った薄い生地に、お肉とかお野菜とかを巻いているんだー」

本当はコーンフラワーから作るトルティーヤを使いたかったんだけど、トウモロコシを粉にする時間はなかつたので、小麦粉で代用してみた。

ルグルさんはハムとチーズを巻いたものが気に入つたみたい。

それから、金属の筒に入れて持つて来たブドウジュースに、セマルグルさんの魔法で氷を入れてもらい……うん。暫く休憩して、しつかり疲れが取れた！

さて、ピクニックの続きを出発よ！

* * *

「な、なんだとっ!! 我が愚弟……ルーファスが既に、この闇ギルドへ依頼していただと!!」

「はい。アルバス第一王子とは違い、直接こちらへ足を運んでいただいた訳ではありませんが」
なんということだ。ルーファスが土の聖女セシリアの奪還に失敗したので、俺様は闇ギルドの人間を使おうと思っていたのに。

まさかルーファスが……というか、闇ギルドの者たちが依頼に失敗していたのか。

「そういう訳で、ジャトランへの女性奪還については、当ギルドでは請けられないという話になつております」

「いくら金を積んでもか?」

「はい。ルーファス第二王子の依頼を受けた者は、ギルドでも古株のベテランです。奴が失敗した以上、当ギルドでは対応出来かねます」

ふむ。これはちゃんと情報を集めて整理しないとマズいかも知れないな。

闇ギルドへの依頼は断念し、実際にジャトランへ行つた騎士たちから話を聞くことにしよう。

「訓練中に悪いな。邪魔するぞ」

俺様が騎士団の訓練所に行くと、近くにいた騎士が驚いた顔で声をかけてくる。

「あ、アルバス様っ!! 一体、どういった御用件でしようか」

「うむ。ルーファスから依頼を受け、ジャトランへ行つた者がいるだろ? 少し話を聞かせてほしいでな」

「お、お待ちください! あれはルーファス様から正式に依頼されたものであり、我ら騎士団としては……」

「何も罰を下そうとしている訳ではない。ただ、実際に現地へ行った者から話を聞きたいだけなのだ」

そういうことなり……と、若い騎士を数名紹介してもらつた。

話を聞いていると、俄かには信じられない話が出てくる。

「セシリ亞がグリフォンとライトニング・ベアを使役^{しえき}していた？ ルーファスも同じことを言つていたが、本当なのかな？」

「はい。その通りです。生きて帰れたことが奇跡だと思っています」

「……他には？ ルーファスは何の準備もせずに海を渡ったのか？」

「セシリ亞様^{さま}が得意とする、防御魔法を無効化する腕輪を持つて行っておりました」

「魔法学校が作っている腕輪だな？ それを持って行つても、ダメだったのか!!」

「残念ながら」

なるほど。愚弟も無策で挑んだ訳ではないようだが……やはりセシリ亞が使役しているという神

獣たちが強力過ぎるのか。

闇ギルドでも、騎士団でも敵わぬとなると、正攻法では無理だな。

俺様が開発中のアレを稼働させられれば良いのだが、あれはまだ試作段階。

ならば、どうするか。

「……そうだな。ここは搦め手でいくか」

「そうと決まれば、魔法学校へ行くとしよう。所詮奴らも闇ギルドと同じで、金を積めば動くからな。

ふつふつ、土の聖女セシリ亞よ。俺様をルーファスと同じだと思つくなよ。

第一章 家の精霊たち

お昼ご飯を食べた後、再び東に向かつて歩いていると、遠目に何か大きな物が見えてきた。

「セマルグルさん。もしかして、あれが目的地ですか？」

「おお、そうだ。あれは大きな壁で、あの中に街があるのだ」

「凄い……けど、あんなに大きな壁を作っているということは、この辺りに凶暴な魔物が出現するんですか？」

「いや。この辺りにそんなものは出没^{しゅつぱつ}せぬ。あれは、家の精霊たちの趣味^{しゅみ}というか、どれだけ大きな建築物が作れるか……と挑んだだけの話だと聞いておる」

実用性は皆無^{かいむ}だけど、とりあえず作つてみたかったっていう、根っからの大工さんなのね。

セマルグルさんの言葉で、このまま進んでも大丈夫なのだとわかり、大きな壁に囲まれた街に向かって歩いて行く。

かなり巨大な壁だったみたいで、視界に入つてから結構な距離を歩いて、ようやく壁の近くに到着した。

だけど、何百メートルも大きな壁が真つすぐ続いているだけで、入り口がわからない。

「これは、何処から中に入るのかしら？」

「セシリア。あっちに道が見えるから、そこから入れるんじゃないのかな？」

「ヴォーロス、ありがとう」

教えてもらつた方角に向かうと、ヴォーロスの予想通り大きな門があつたので、ここから中へ入れるみたいだ。

「……つて、誰も居ないのね」

「ふむ。おかしいな。ここにはいつも兵士が立つておつたのだが」

「そうなの？ ……セマルグルさんはこの街に入つたことがあるのよね？」

「もちろんだ……ああ、家の精霊という別名しか話していなかつたな。この街はコボルトという獣人族の街なのだが……まあ当人たちを見た方が早いだろう。この街は我やヴォーロスも入れるから、共に行こう」

家の近くの獣人族たちの村では、村人を怯えさせるから……と、セマルグルさんやヴォーロスは村に入つてくれなくて、いつもユーリと二人で入つていた。

だけど、この街には入つて良いらしい。

セマルグルさんたちが一緒に来てくれるのは心強いけど、どういうことなのだろうか。そんなことを考えながら門をくぐり、街の中へ入り……その疑問がすぐに氷解した。

「わあ……可愛いっ！」

「せ、セシリアよ。こ奴らが可愛いのか？」

「え？ すつごく可愛いでしょ？ だって、物凄くモフモフだよ？」

セマルグルさんの言つていたコボルトという種族は、一言で現すと、二足歩行で歩くワンちゃんだつた。

リリーちゃんたちの獣人族さんや、バステトさんは人間に猫耳が生えているつて感じだけど、コボルトさんたちは、犬そのものだから……うん。どつちも可愛いっ！

街の中を歩く小柄でモフモフなコボルトさんたちを見て、思わず走り寄つてしまいそうになつたけど……何かがおかしい。よく見たら、街の中を歩いているのは数人で、多くの人が地面に倒れている！

「大丈夫ですかっ！」

「……放つといて」

「ええつ!? でも……」

「うるさいなあ。オイラたちのことは放つといてよつ！」

倒れているコボルトさんの一人に声を掛けたけど、邪険にされ、話も聞いてもらえなかつた。

一体、この街で何があつたのだろうかと考えていると、ユーリが声を掛けてくる。

「ねー、セシリ亞ー。このコボルト……酔っぱらつているだけだと思うよー。ほら、見てよー」

ユーリが指示示す方に目を向けると、先程のコボルトさんの足元に、いかにもお酒ですつて感じのビンが転がつていた。

「ふむ……コボルトは勤勉な種族のはず。酒を飲んで酔い潰れるなど、聞いたことがないのがな」

「セシリ亞。街の中を見てきたけど、みんなお酒を飲んで酔っぱらつているみたいだね」

ヴォーロスが街の方から戻つて来たけど、思い返してみると、さつき歩いていたコボルトさんも千鳥足だつたように思える。

だけど、どうして街中に泥酔者どくすいしゃが？

初めて獣人族の村へ行つた時は、村人たちが誤つて毒キノコを食べてしまつて、みんな寝込んでいた。

しかし今回は、歩きながらお酒みたいなものを飲んでいるコボルトさんもいるし、自らお酒に溺おぼれにいつているかのようだ。

「とりあえず、話を聞いてみましようか」

「うーん。話が出来るような人が居るかなー？ さつき僕が話を聞こうとしたら、熊くまが喋るなんてありえない……って言いながら、一人で笑つていたんだよ？」

あー、コボルトさんは人間よりも動物寄りだからか、セマルグルさんやヴォーロスを見ても驚かないけど、流石に喋るのは想定外みたいね。

「ぜ、全員が酔っぱらつている訳ではないと思うし、探せば話が出来る人もいるはずよ」

「ふむ。それはセシリ亞の言う通りではあるが、酔っぱらいが多いのであれば、どのようなトラブルに巻き込まれるかもわからぬ。皆で揃つて行動しよう」

セマルグルさんの提案で、みんなで固まつて街の中を歩いて行き、会話が出来そうな人を探すことに。

「あの、ちょっと良いですか？」

「……酒なら、もう残つてないよ！ あっちの食料品店に行くんだ」

「あの、私たちはお酒が欲しい訳ではなくですね」「どうして、神様は俺たちを見放したんだー？」

え一つと、ごめんなさい。唐突過ぎて、ちょっと何を言つてはいるか、わからないです。
気を取り直して別のコボルトさんに話を聞こうと試みたけど、かなりお酒を飲んでいるからか、
さつきの人と同じような感じで会話にならない。

そんなことを何回か繰り返したところで、呆れた様子のヴォーロスが口を開く。

「セシリ亞。これはもう、お酒を飲んでいる人は諦めた方が良いんじゃないかな?」

「そうかもしれないわね。まずは酔っぱらっていない人を探しましようか」

ヴォーロスの提案を受け入れ、街の中心にある広場から離れ、住宅街へ向かう。

中心の方では、お酒を売っているお店もあつたし、離れてしまえばきっと大丈夫だと思ったのだけど……今度は出歩いている人がいなくなってしまった。

「こうなつたら……すみませーん」

近くにあつた家の扉をノックして暫く待つと、コボルトさんが出てくれた。

「あの、少しあ伺いしたいことがあるのですが……どうして、この街の人たちはみんな泥酔しているのでしょうか?」

「……飲まなきややつてられないからだよ」

「それは一体どういう……」

「悪いが、帰つてくれ。その話はしたくないんだ」

コボルトさんがそう言うと、バタンと扉を閉められてしまった。

さつきの人は酔つている感じはしなかつたけど、町中に泥酔者がいる理由は教えてくれない。でも、一応会話は出来た! という訳で、諦めずに次の家に行き、そのまた次の家へ。

そんなことをめげずに繰り返していると、五軒目で初めて女性のコボルトさんが出てきた。

「あ、あのつ! 私はこの街へ来たばかりの旅人で、セシリ亞と言います。この街について少しだけお話を聞かせていただけませんか!?」

「え? は、はあ。なんでしょうか?」

「えつと、街中に泥酔しているコボルトさんたちがいるんですけど、どうしてなのでしょうか。コ

ボルトさんたちは、真面目な種族だと聞いたのですが

そう言うと、女性が悲しそうに顔を伏せる。

「そうですね。私も主人や兄が泥酔している姿なんて初めてみました。お酒を飲まない訳ではないのですが、せいぜい夕食時に少し嗜む程度だつたのに」

「あの、みなさんが一齊に泥酔するなんて、何か訳があるんですよね?」

「はい。あの、街の中心に大きな広場があつたのはご覧になりましたか?」

「ええ。とても広くて……けど、その広場で酔いつぶれているコボルトさんたちが大勢いました」

「その場所……本当は広場ではないんです。大きな木が何本も生えた、林なんです」

林つ!? 街の中心に!? だけど樹木どころか、切り株すらない綺麗な平地だつたわよ!?

「この街は大きな壁で囲まれていますよね? なので、植物を日光が当たる場所に集めようということで、この壁が出来た際に樹木を街の中心に移したんです」

「それが、何かマズいことに?」

「いえ。壁を作ったのも、樹木を移したのも、私が子供の頃の話です。もう二十年も何事もなかつたのに、数日前に突然木が消えたのです」

「木が消えた!」

「そうなんです。枯れた訳でも、切り倒された訳でもなく、突然消えたんです。しかも、新たに木を植えて、翌日には消えてしまうんです」

木が消えるなんて、そんなことがあるのだろうか。

街の中には芝生や花壇があつて、草花は普通に生えていた。だけど、木だけが消えてしまうなんて。

「我々コボルトは、家の精霊と呼ばれる種族で、皆が大工であり、建築士です。ところが、このような事態になり、長老たちが話し合つた結果、大地の女神様から家を建てるな……と怒られているのだという結論に至つたのです」

「大地の女神様……が、家を建てるなって言いますかね?」

「わかりません。ですが、木がなくなつたことは事実ですし、我々は木を沢山切つて来たのも事実ですのです」

女性によると、コボルトさんたちの男性は家を建てることに誇りを持つており、生き甲斐^{ほこ}でもあるらしい。だけどそれが出来ない今は、完全に無気力で、自暴自棄^{じぼうじき}になつてしまつてしているのだとか。「あの、教えてください、ありがとうございました」

「いえ。こちらこそ、せつかく来ていただいたのに、街がこのような状態ですみません」

女性にお礼を言い、ひとまず家から離れると、セマルグルさんたちに話を聞いてみると。

「セマルグルさん。大地の女神様っていう方が居るの?」

「うむ。正確な居場所までは知らぬが、モコシという女神がいるな」「僕も話は聞いたことがあるよー! 会つたことはないけど……ただ、優しい女神様だつて聞いたんだけどね」

ヴォーロスもモコシという女神様は知つてゐるらしい。

だけど、女神様が家を建てるなつて木を消したりするのかな?

大地を司^{つかさ}る神様だし、木を大事にするのだろう。だから、木を切らないで……と言つてくるのであれば、まだわかる。

だけど、木を消すつて……その消されてしまつた木はどうなるのだろうか。

切られても根っこが残つていれば、そこに接ぎ木をすることだつて出来るけど、それすらないつていうのは、おかしい気がする。

「ねーねー、セシリア。セシリアの魔法で木を生やしてみたらー?」

「そうね。ちょっと試してみましようか」

ユーリの提案で、街の中心にある広場へ。

あちらこちらでコボルトたちが倒れているけど、人気のないスペースを見つけ、具現化魔法を使つてリンゴの種を植える。続いて育成魔法を使い、その種を発芽させ……られない!?

「うそ! 育成魔法が……発動しているのに、植物が育たない!」

「ふむ。では、先程のコボルトが言つていた話は本当なのかもしねな」

「こんなことがあるなんて……」

セマルグルさんの言葉を聞きながらも、半ば^{なか}茫然^{ぼうぜん}としてしまう。

土魔法は今まで何度も使つていて、土の聖女という称号を得る程に得意としている魔法なので、流石にショックを受けている。

とはいえ、具現化魔法で種は作れたのだから、土魔法自体が使えなくなつた訳ではないようだけれど。

「セシリア。他の植物を試してみたら?」

「そ、そうね。じゃあ、お花を咲かせてみようかな」

ヴォーロスに言われて我に返り、次はパンジーの種を作つて植える。

そして育成魔法を使うと……^{はづが}発芽^{はつが}し、綺麗な花が咲いた。

「リンゴはダメだったけど、パンジーは大丈夫なのね」

「じゃあ、やっぱり木だけがダメなんだねー。でも、ユーリは木がないのは困るかなー」

ユーリはリスだから、普通は木の上で暮らすものね。

けど、どうして木だけがダメなのだろうか。

「そうだ。街の外で使つてみましようか」

壁の外に木は生えていたつけ? この街の壁のインパクトが強すぎて、木が生えていたかどうか覚えていないなあ。

そう考えながら街の門を出て、周囲を見渡すと……見事に、一本も木が生えていない。

街から少し離れ、街の中と同じ様にリンゴとパンジーで試してみると、ここでもパンジーしか生えてこなかつた。

「うーん。ここへ来るので、木つて生えていたつけ?」

「ユーリは見てないよー?」

「ふむ。少し待つておれ。上から見てみよう」

セマルグルさんが羽ばたき、真っすぐ上に登つっていくと、周囲を見渡して戻ってきた。

「うーむ。この街の周りに木は生えておらぬな」

「じゃあ、街どかは関係なしに、広い範囲で木が消えているつてこと?」

「そうなるな。とはいえ、離れた場所には普通に森があつたし、この街を中心には木が消えている様に思えたな」

「ということは……大地の女神様のモコシさんが怒っているのは、本当のかな?」

「否定は出来ぬな」

「どうしよう。私たちの家とか、そんなことは置いといて、大勢のコボルトさんが生き甲斐を失つてしまつている。

これを、どうにかしてあげられないだろうか。

そんなことを考へていると、陽が沈み始めていて、周囲が茜色に染まつていた。

「あ、とりあえず今日は休みましょか」

「そうだな。しかし、コボルトたちがあの状態だ。元々治安が悪くはない場所ではあるが、街の中には泊まらぬ方が良いのではないか?」

「僕も街に泊まるのはやめておいた方が良いと思う。見たところ、コボルト以外の種族は街に居なさそうだつたし、酔っぱらいに変な難癖をつけられるのも嫌だしね」

普通に考えたら、セマルグルさんやヴォーロスに難癖をつける人なんて居ないでしようけど、酔っぱらいは訳がわからないことをするからね。

私も日本でお酒の席に出ないといけない機会が何度かあつたけど、酒癖の悪い先輩が上司に絡んで大変なことになつたのを目撃したし。

……うん。巻き込まれたくないなあ。

「じゃあ、この辺りに家を作りましょか」

土魔法を使って木を生やせはしないけれど、具現化魔法で石や鉄を出せるので、凄く大きなレンガ……みたいなのを幾つか作り出してみた。

というのも、拠点にある家は大きな石板を支柱に立て掛けただけの簡単な造りだ。でも、大工さんたちから様々な話が聞けたし、コボルトさんたちの街でいろんな家を見たので、挑戦してみたんだけど……うん。難しい!

同じ大きさの石を出していはるはずなのに、何故か隙間^{すきま}が出来ていて……やつぱり、本職の人たちにお願いしないとダメね。

ただ、セマルグルさんが入つても大丈夫なくらいに、広い家にはなつたけど。

「セシリア、凄い! 大きな家だねー!」

「でしょー? これなら窮屈^{きゅうくつ}にならないと思うし、セマルグルさんもたまには皆と一緒に寝よう

よー！」

ユーリが嬉しそうにピヨンピヨン跳ねているけど、私も内心は飛び跳ねている。いつもヴォーロスの背中の上で眼つてモフモフを堪能させてもらっているけど、セマルグルさんのモフモフは抱きつかせてくれないのよね。

拠点にある家が狭くてセマルグルさんが入れないっていう事情もあつたけどさ。

だけこれなら、セマルグルさんのモフモフを思う存分堪能出来るはずよつ！

そう思つていたんだけど……

「あー……セシリアよ。気持ちは嬉しいのだが、私は入れぬぞ？」

「ええつ!? どうして!? 中は十分広いよ?」

「うむ。中は広いが、入り口が狭すぎるのだ」

あ……しまつた！ ドアなんて作れないから、出入り口は拠点と同じように石の板を作り出して塞ぐつもりで……つ、作り直さなきやつ！

「ちょ、ちょっとだけ待つて！ 今すぐ入り口を……」

「いや、それよりも食事にせぬか？ 我はチーズが食べたいのだが」

セマルグルさんに言われて気付いたけど、家を作っている間に、陽が完全に沈みかけていた。

「そうね。夕食……つて、待つて！ コボルトさんの街に泊まると思っていたから、昼食しか用意

していないのよ。急いで何か交換してもらつてくれるわね」

獣人族さんも鬼人族さんも、貨幣は使っておらず、基本的に物々交換だ。

なので、辺りにトマトを生やして急成長させ、ヴォーロスやユーリにも手伝つてもらつて収穫する。

木は植えられないけど、トマトは植えられた。ちゃんと木の類ではないと判定されたみたい。

ヴォーロスとユーリについて来てもらつて、街の中にあるさつき街の人�が言つていた食料品店へ行くと、パンやチーズに、ハムやお水と交換してもらえた。

流石に拠点に作ったオーブンをここで再現するのは大変だけど、具現化魔法でコイルを作つてヴォーロスに弱めの雷を流してもらえば、簡易的なコンロが出来上がる。

なので、同じく具現化魔法でホットサンドメーカーを作り、パンにチーズやハムを挟んで温める

と……出来たつ！

「お待たせー！ ご飯が出来たよー！」

木が生やせないだけで、葉物野菜は普通に作れるので、レタスやキャベツにルッコラなど、野菜たっぷりのサラダも一緒に出して……セマルグルさんはちゃんと野菜も食べようね？

セマルグルさんがサラダを見て、ちょっと苦笑い表情を浮かべていたけど、みんな完食したので就寝することに。

「お風呂……とまでは言わないけど、水浴びはしたかつたなあ。流石に飲み水で水浴びする訳にもいかないし」

「ふむ。先程、ヴォーロスが雷魔法を流していた金属を使えば、水は出せるぞ?」

「えっと、どうやって……あ、そうか! 水魔法!」

「その通りだ。私は水は出せぬが、氷は出せるからな」

あんまり大きすぎても大変なので、ちょっと大きめの桶かなます……くらいの箱を作ると、セマルグルさんがそこに氷の塊かたまりを出してくれた。

簡易コンロとして使っていたコイルで氷を解かすと、ちょっと冷たいけど、水が出来た。

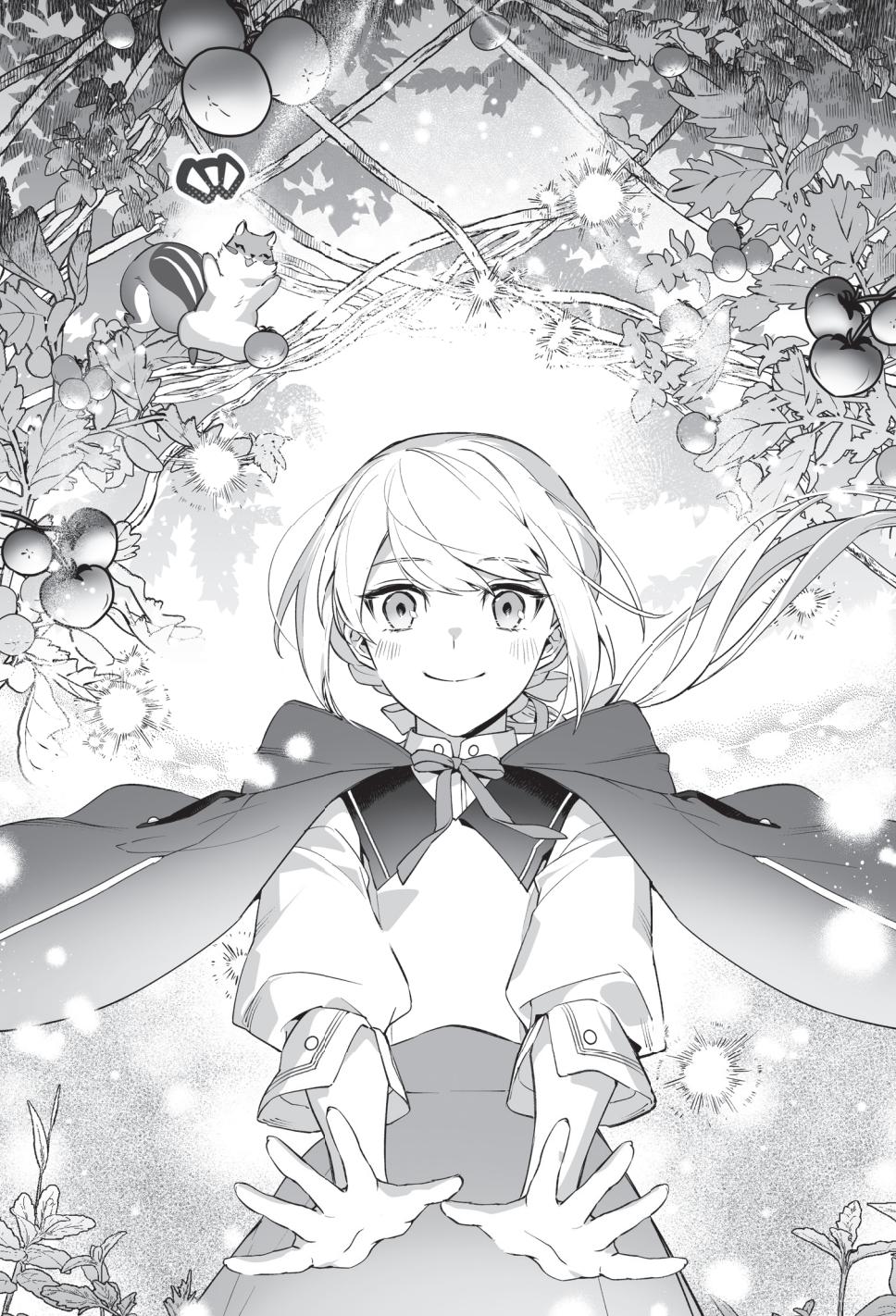
セマルグルさん曰く、一応飲むことも出来るらしいけど、美味しくはないのであまりオススメしないらしい。

だけど身体を拭くには十分なので、布を浸ひたして身体を拭いた。

サッパリしたところで、寝ることに。

ただ、せっかく作った石の家だけど、セマルグルさんは入れないし、私とユーリはヴォーロスの上で寝るので、半分以上使っていない。家を建ててもらう時には、今回の失敗をしつかり伝えて、ちゃんと活かしてもらわないとね。

……いやまあ、私と違つて専門にやつている人たちなら、こんなミスはしないのかもしれない



けど。

翌朝。夜間に何事もなく、ぐっすり休めたので、しつかり朝食を食べて大地の女神のモコシさんの所へ行つてみることに。

「ひとまず、どうして木が生えないようにしたのか、理由を聞かないとな」

「そうだね。聞いた話では、理不尽なことをしてくる女神ではないと思う。何かしら、理由があるはずだから、それを解消してあげれば良いんじゃないかな」

「なるほど。じゃあ、ヴォーロスの言う通り、まずは話を聞いてみよう……って、よく考えたらモコシさんって、何処に居るの？」

昨日作つた仮の家や、簡易コンロなどを消して、出発出来る状態になつたけど、どつちへ行けばよいのかわからず、足が止まる。

「僕は何処に住んでいるかは聞いたことがないなー」

「我也知らぬな。大地の女神というくらいだから、空にはいないと思うが」

「ユーリも聞いたことがないかなー」

「うーん。出発しようとして、わずか十秒で行き詰まつてしまつた。モコシさんって、一体誰が知つているのだろう。

「……あつ！ そもそも、大地の女神が怒つているつて言つたのは、コボルトさんたちの長老さんって話だつたよね？」

「なるほど。その長老なら、モコシを知つてゐるはずだね」

「そういうことっ！ 早速コボルトさんたちの街へ行つて聞いてみましよう」

——という訳で、再びコボルトさんたちの街へ。

ただ、何処に長老さんが居るのかわからないので、街に居る人たちに聞いてみるんだけど……まともな答えが返つて来ない！

何人も醉っぱらつてゐるコボルトさんたちと話し、埒^{ごう}が明かないと思つていたら……業^{ごう}を煮^にや

したセマルグルさんが、泥酔しているコボルトさんに向けて何かの魔法を使用した！？

「ふん……」

セマルグルさんが放つた白い光が、酔い潰れているコボルトの男性を包み込んだと思つたら……突然起き上^がつた！？

「えつ!? セマルグルさん!? 今のはなんですか!?!」

セマルグルさんの返答を聞く前に、コボルトの男性が声を上げる。

「……えつ!? あれつ!? 僕は一体……」

「お主。コボルト族の長老が何処にいるのか教えるのだ」

「うえつ!? グ、グリフオン!? どうしてこんなところに!?」

いやあの、昨日も普通に街の中を歩いていたし、この人だつて少しそ前まで普通に……いや、泥酔していたから普通ではなかつたけど、セマルグルさんと話していたんだけどね。

それにしても、セマルグルさんは一体どんな魔法を使用したのだろうか。

「で、長老は?」

「は、はいっ！ その通りを真つすぐ行つて、三つ目の角を右に曲がつたところに、役場がありますので、そこに居るかと」

「うむ。礼を言う」

セマルグルさんのおかげで、あつという間に長老さんの居場所がわかつてしまつた。

雖然としているコボルトさんを他所に、教えてもらつた方向へセマルグルさんが歩いて行くので、慌ててついて行く。

「セマルグルさん。さつきは何の魔法を使つたんですか？」

「ああ、あれは治癒魔法だ。泥酔も状態異常の一種だからな。泥酔という状態異常を解除させたのだ」

セマルグルさんの治癒魔法は、怪我や火傷を治すだけではなくて、そんな使い方も出来るんだ。

日本で使えたら、それだけで商売が出来そう……つて、そんなことを考えている場合ではなかつたわね。

教えてもらつた通りに進んで行くと、周囲よりも二回りくらい大きな建物が見えた。

おそらくこれが役場なのだろうが、流石にセマルグルさんは入れそうにない。ヴォーロスならギリギリ入れそุดけど、通路などは狭そうな感じがする。

なので、私とユーリだけで中へ入つたのだけど、人が……居ない？

「あ、いらっしゃいませ！ すみません。今、諸事情で職員の大半が休んでしまつておりますて、ちょーつとばかり人手不足なんです」

誰も居ない受付で困つていると、コボルトの女性が走つてきた。

「た、大変そうですね」

「その……はい。私、本当はただの受付なんです。それなのに、休んでいる職員に代わつて補助金の申請対応をしたり、不在の管理職の代わりに私がサインしたり、備品の補充をしたり、相続の相談に乗つたり……あははは、無理！ もう無理いつ！ 蒸留酒の酒税が減税される樽の大きさなんて、どの資料に載つているのよおつ！」

えーっと、どうやらこのコボルトの街の騒ぎのせいで、受付の女性が大変なことになつてていると

立ち読みサンプル はここまで

いうのだけは良くわかつた。

まだ午前中なのに、ちょっと目が怖いというか、もう限界を超えてる感じがする。

「それで、お客様はどのようないの御用件で?」

「あ、えつと、長老さんにお会いしたいなーって思いまして」

「長老に!? アポは……」

「す、すみません。取っていません」

「では、残念ながら面会は無理です。今は、建築ギルドに鍛冶師ギルド、鍊金ギルドや薬師ギルドなど、木材についての陳情ちんじょうを聞く予定が詰まっています、今から約束を取り付けるならば、最短で二十日後ですかね」

「二十日つ!? 私たちはモコシさんに話を聞きに行きたいんだけど、街がずっとこの状態というのはどうかなあ。」

「えつと、私は大地の女神モコシさんに話を聞きに行きたくて……」

「ん? それなら、別に長老の許可は要らないですよ? 特に制限はありませんので」

「え? もしかして、モコシさんが何処に居るかご存知なのですか?」

「ええ。流石に忙し過ぎて案内は出来ませんが……あ、お客様が受付をしてくださるなら、私が代わりに女神様の所へ行ってきますよお? 何をするか知りませんが」

えーっと、忙し過ぎるからか、メチャクチャなことを言つている気がするけど、大丈夫かな?
「すみませーん。さつきの酒税の件なんですが……」

「ひいいつ! しょ、少々お待ちくださいあああいつ!」

「あつ! 待つてください! モコシさんの居場所だけ教えてください!」

よく見たら、役場の中にある幾つものカウンターの前で、大勢の人が待つてゐる。

私の後ろに誰も並んでいないから、てつくり捌さばき終わつてゐるのだと思つていたけど、そうじゃなくて現実逃避げんじよとうひで私のところへ來ていたんだ。

「お客様。女神様のところには、こんな感じで行けますう」

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ。簡単な御用件で助かりましたあ。ところで、税金について詳しくないですか?」

日本の法律でさえ大した知識もないのに、コボルトの街の税金なんてわかる訳もなく、役に立てないと謝つておいた。

いや、謝る必要もないんだけど、なんだか凄く大変そうで……ううん。あの女性のためにも、早くなんとかしてあげないと。

おそらく地図だと思うけど、折りたたまれた紙をもらつたので、役場を出てセマルグルさんたちと一緒に見てみる。